

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-52

学校名・団体名	岡崎市立北野小学校 I C T活用研究会
HPアドレス	http://www.oklab.ed.jp/weblog/kitano/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	映像制作で養う表現力・批判的理解力
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>子供たちに、自分たちの思いを他者へを伝えるための映像制作を行わせることにより、身近な社会的・科学的事象に対する興味・関心や理解力、自己の考えを言語化、視覚化（映像化）する力、他者と協調する力、コミュニケーション能力、問題解決能力を高めることを目的とした。さらに、映像の制作過程において、子供たちの情報に対する批判的な理解力を向上させることも目指した。</p>	

1 実践の概要

本実践では、次の3点に重点を置いた。

- (1) 映像制作を、「自己の内面や、自らを取り巻く社会的な現象・問題などに対する思いや考えを、言語化・視覚化し、表現する活動の場」として位置づける。(企画、取材、撮影、作品発表)
- (2) 仲間が企画・取材・制作した作品について、その表現や内容を批判的に理解することができる場面の制作の過程に位置づけること。(コンテ検討会、作品発表)
- (3) メディアの活用力を高めるため、常に制作の主体を子供自身に置き、子供が積極的に撮影や編集等の作業に取り組むことのできる場を設定すること。(ビデオ講習会、撮影・編集作業)

2 具体的な活動

【6月】オリエンテーションと映像制作に対する興味付けを行った。子供に対しては、他校児童生徒の制作した映像を視聴させ、映像制作に対する意欲・関心を高めるとともに、映像制作の過程において避けては通れない著作権などの情報モラルの学習を行った。また保護者に対しては、学級通信や学級懇談会等で映像制作活動についての周知を行った。また、教師に対しては、市内ケーブルテレビ局より講師を招き、教材としての映像制作の方法や注意点、魅力について研修を行った。

【7月】具体的な映像制作活動の手始めとして、6年生の3学級において「身近な生き物紹介ビデオ」を制作した。自分が学校近辺で見つけた生き物の魅力を伝える活動を通し、撮影の仕方や自分の思いを伝えるためのストーリーの構成の仕方を学んだ。また、ナレーションなどの言語的表現については国語科で各担当が、肖像権の学習を岡崎市学習情報指導員が特別活動において行った。

【9月~12月】北野小学区には、「北野廃寺」など多くの歴史資産がある。また、学区を流れる矢作川は江戸時代まで川筋を幾度も変動させており、北野小自体がその旧河道上に建てられている。6年生の総合的な学習と関連させ、これら北野小学区の貴重な歴史資産を映像化する活動に取り組んだ。自らが生活する地域について取材する本活動では、子供たちは普段見慣れた「もの」を見つめ直し、さらに自らのメッセージを加えて映像化する経験をした。これにより、社会的事象に対して批判的に理解する姿勢を持ち始めるようになった。

加えて、11月には、岡崎市視聴覚ライブラリーの支援を受け、高学年の子供を対象に「子どもビデオ教室」を開催した。これは子供数人に対して一人の割合で講師がつき、1~2分間の短い映像作品を制作する中で、コンテを作成する際のコツや、様々な撮影の方法、編集のノウハウなどを学ぶことができる講座である。テーマは「冬の植物」「部活動」など、子供たちの希望に沿って設定された。ノウハウをきちんと学んだことで、子供たちの作品の質も大きく向上した。作品は市内の映像作品コンクールに出品され、多数が入賞するなど高い評価を得た。(計画では夏休み期間に実施する予定であったが、諸事情により2学期の活動に編入した。)

【1月】2学期に制作した作品について、岡崎市視聴覚ライブラリーより講師を招き、講評をいただいた。子供たちに対しては「普段身近すぎて見落としていた、学区の『良さ』を再発見できる作品である」という言葉を、教師に対しては「子供同士が作品を批評し合う活動について、「一人一人が映像の作り手であり、その苦労をよく分かり合っているからこそ、制作者の視点での率直な意見交換ができ、批判的に作品を観る経験となった」という言葉をいただくことができた。

【2~3月】本報告書執筆段階において、完成した作品を学区に向けて発表すべく準備を進めている。諸事象により、会場を使用しての発表会の形式で開催することが困難になったため、DVDを配付し、アンケート形式で感想をいただくなどの代替案を計画している。

3 成果

(1) 映像制作活動を通して、子供たちの対人コミュニケーション能力を向上させることができた

チームで映像制作をする過程では、内容や制作方針について共通理解や意思統一を図らねばならない。チームでの映像制作という具体的な活動を設定したことにより、子供たちは、必然的に仲間と緊密なコミュニケーションを取るようになった。また、取材活動では、インタビューを数多く行わせた。子供たちは、相手の表情や言動を見ながら質問を行い、自分たちの思いを代弁させるためのコメントを取材対象から引き出すことに成功していた。これらのことから、映像制作の過程で子供たちの対人コミュニケーションを向上させることができたと言える。

(2) 子供自身に映像制作をさせることにより、表現力を向上させることができた

今回の実践では、子ども自身が映像作品の制作者となり、自分の思いを映像化すべく、コンテ作成や撮影・編集を行った。例えば「子どもビデオ教室」で制作された「部活動(ソフトボール部)」をテーマにした作品では、単にソフトボールの技術を紹介するのではなく、子供同士が技術を教え合うことを通して心を通わせる様子を描いていた。そこには、何をナレーションや台詞として言語化し、何を映像として表現するのかについて考えを巡らせ、自分たちなりの最適解としての映像表現を試みる姿があった。このように、子供自身に映像制作をさせることにより、自分の言いたいことを映像化・視覚化する表現力を伸ばすことができたと言える。

(3) 作品の相互批評活動を設定したことにより、情報に対する批判的な理解力が高まった。

子供たちは、批評活動において、単なる批判ではなく、相手への共感を込めた指摘をすることができた。ともに映像制作に取り組んだ仲間として尊重し合い、対等な立場で、制作者の思いを汲み取りながら、お互いの作品を批判的に理解し、作品の質を向上させるためのアドバイスを伝え合う経験をすることができた。